

特250

642

綾歌郡ニ
於ケル

建武中興關係史蹟

綾歌郡神職會



始



序

史傳多しと雖芳野朝時代の哀史ばかり強く人心に衝動を與ふるものはあらず。狂風は狂風を呼び、波瀾は波瀾を生み、幾十年に涉りて全國に漲りし戰雲の下、累世歴代族を擧げて奉公に身血を捧けたる純忠義烈の華は燦として史上に輝き、春風秋雨六百年茲に愈々益々其光を放つ。今回綾歌郡神職會此史蹟に關する冊子を發行せらる洵に意義深き舉といふべし。庶幾は忠勇義烈の先蹤を仰き、依て以て此非常時局に善處し國難打開に邁進するの信念を固うする事を得ん

昭和十年三月十日日露戰役三十周年に際する
國威發揚祈願祭の奉仕を終りて

香川縣神職會長 琴 陵 光 熙

長所與彦氏寄贈本

緒言

昭和九年ハ建武中興六百年記念ニ當リマシタ故、後醍醐天皇并ニ之ヲ繼承シ給ヘル 後村上天皇 長慶天皇 後龜山天皇ノ聖業ヲ奉謝シ奉リ併セテ關係諸忠臣ノ英靈ヲ奉齋シテ皇道宣揚日本精神ノ作興ニ貢獻センタメ全國ニ涉リ各種ノ事業カ行ハレマシタ吾綾歌郡モ亦タ南風競ハサル時ニ方リ忠誠ヲ正朝ニ捧ケ奉リシ忠臣ノ遺跡ニ富ンテ居ル、就中中院源少將以下ノ據リシ金丸城址（長炭村）細川清氏ノ居城高屋城址（松山村）并ニ其部下三十六士ト共ニ戰死シタ三十六ノ遺跡（林田村）其他依然山川風物長ヘニ存スルモ之ヲ語リ之ヲ傳フル人稀ニシテ之ヲ訪ヒ之ヲ吊フモノ少キハ實ニ痛憤ノ至リテアル爰ニ吾神職會員相議リ其忠靈ヲ慰祭シ其遺跡ヲ顯揚シテ些少ナリ凡世教ニ資シタイト思フテ林田村、長炭村ニ於テ祀典ヲ修メ香川縣名勝史跡天然記念物調査員鎌田共濟會調査部主事岡田唯吉先生ニ請ヒ現地講演會ヲ開催シタ依

テ其筆記ヲ取纏印刷シタカ素ヨリ僅少ノ時間ノ講演ナル故極メテ簡單デア
ルガ幸ニ此冊子カ稽古照今ノ葉トナリ當年ノ忠誠ヲ回想シ追慕感激此ノ郷土
ノ華香ヲ永久ニ飛散セシメヌ様ニ致シ後生薰育上ノ資料トモナラハ本會ノ希
望ト本冊子刊行ノ目的トハ達シ得ル次第デア
ル

尙改メテ此事業ニ付多大ノ御指導ト御賛助トヲ辱クシタル、琴陵香川縣
神職會長閣下、岡田先生、長町與彦先生ニ對シテ滿腔ノ謝意ヲ表シ併セテ
直接ニ間接ニ援助斡旋ノ勞ヲ執ラレシ、關係村學校并ニ有志各位ニ對シ謹
ンテ其厚意ヲ謝ス

昭和十年三月

香川縣綾歌郡神職會

綾歌郡ニ於ケル建武中興關係史蹟

昭和九年五月十六日綾歌郡林田村字三十六ニ於テ

○細川清氏外三十六士ノ史蹟

香川縣史蹟名勝天然記念物調査委員
鎌田共濟會調査部及全博物館主事

岡田唯吉先生講演

只今會長様からお話がありました通り、本年は建武中興以來六百年に當ります。即ち御承知の通
り、三月十三日は建武改元の記念日でありました。

一昨年秋から明治神宮宮司有馬良橋大將が凡ゆる階級の知名人士數十人と一緒に發起人となつ
て紀念協會を設立せられました。

そして當日は南朝四代の天皇の慰靈祭を行ふのは勿論、當時南朝のために働いた勤王家を顯彰し
其の遺跡を調査して一般世間の人々に知らせる爲南朝の天皇后醍醐天皇を御祀りしてある吉野神宮
を始として、楠公社、新田神社、名和神社等に對しては紀念協會の方から奉幣使を立て慰靈祭を取
り行ふと云ふやうな計畫を立てられたのであります。

當時の天皇の大御心、忠臣の心中を今日吾々が深く味つて現在の非常時に處して行く道として最
適なものにしようとし色色準備を行ふたのであります。所が本年三月中には豫定實行となりまして目
出度目的は十分に達することが出来たのであります。

本縣でも右勤王家を祀つてあるお宮を調べました所が非常に少なかつたのであります。三豊郡上高瀬に唯一つ郷社の新田神社がありました。之は脇谷義助が南北朝時代に四國の大將として來られ四國軍を總督して南朝のために働いたのであります。現今の伊豫三芳驛の附近に來られて南朝方の軍の氣勢が大に上がったのでありましたが、惜しい事には間もなく花を見ないで病死したのであります。所が其の家臣安藤衛門三郎が當讃岐に逃れて上高瀬にかくれ主家の新田氏を祭つたのであります。之が新田神社であります。新田神社は外にもかなりありますが何れも社格が低いので會の方から奉幣使が來られなかつたのであります。

とにかく會の事業は全國的に行はれてゐますが當時の勤王諸家殊に楠氏、新田氏等は甚だしい虐待と壓迫を受けました。ために其の遺物遺跡の今日に傳はるものは大變に少いのであります。そこで南朝遺跡の研究は中々むつかしいのであります。

本縣の遺跡を東から順を追ふて申しますと、大川郡福江村に大塔宮の一時居られたと云ふ若王寺及虎丸城並に其の附近の東山に篠塚伊賀守（脇谷義助の臣）を祭る篠塚明神があります。丹生村に脇谷義治が父の死後こゝに逃げて今の字土居あたりに居たと云ふので新田神社があり、脇谷氏の菩提寺脇谷寺があります。それが中中立派なものであります。今は脇谷氏が衰へ家も閉ぢ寺も無住と

なりて如何にも氣の毒なやうであります。

香川郡にはありません。

綾歌郡には長炭村に長尾、炭所等大小數城があります。又中ノ院源少將の據城高丸山とその應援軍の大谷、小龜兩氏の城もあります。本村のは後より申します。

仲多度郡の七ヶ村にはやはり長尾城に連絡する大谷氏の出城春日城、三豊郡財田村に本篠城、大河内城等があります。そして此財田城を細川顯氏が攻めてゐますが誰が之を守つてゐたかは正確に分らないのであります。

以上の様に岡手の方にはかなり澤山ありますが海上には少いのであります。唯小豆島寒霞溪近くに星ヶ城があるのであります。之は備前兒島から渡つて來た佐々木信胤が築いたものであります。こんな風に縣下には可なり所々にありますが之を證據立てる史料が殆んどないと云ふ事はまことに遺憾な次第であります。

只今から御當地の遺跡について御話致します。史實の證據史料は不十分でありますが考證推定によつて大様をお話致します。當林田村へ參るに三十六といふ字名には誰でも注意致すのであります。それは近頃附近の旅行案内にもはいつて居り數字の土地の名が珍しいからであります。

それでは一体三十六といふのは何う云ふ理かと申しますと清氏の部下三十六人の決死の士が南朝のために討死した所といふ事であります。

清氏の戦つたのは後村上天皇の正平十七年七月二十四日であります。當日清氏は討死したのであります。今の香川郡池西村の學者中山城山は今から百年前當地の人々に頼まれてこゝに「細川清氏戦死之碑」を建てたのであります。

清氏は正平十六年勤王軍を起して近畿から出發し阿波に渡つてから讃岐木田郡白山の麓にある白山城に勤王軍を募りました。すると南方十河神内三谷等の地方武士共が一族郎黨をひきつれて馳せ參じましたので清氏は大いに喜びました。

その後要害の地である此の東の高屋城に移據することになりました。高屋城は雄山の東麓遍照院の後の小高い所にあつたらしいのであります。當時の城は天然の要害險阻の地で敵がよち登る事の出来ない所を選んで其處に幕か板か塀で取圍んだものであります。當時は弓矢を防ぐ事の出来る程度でよろしいのであります。未だ大砲、鐵砲等の火器がなかつたからであります。だから幕か板の覆で十分であつたのであります。

戦争の時は城内に居るのですが平時とか未だ敵が遠い所に居る時等は遍照院邊或は今少し西に出

て雄山の西麓附近を根據地として居たのでありませう。元來寺は人の集合するにも物資の需用供給にも便利な土地であります。其の上一般に昔の寺は要害地に建てられておりました。

當時の戦法としては敵を自分の本城によせつけない様にして出来るだけ遠地で戦ふのが本體でありました。此の頃から槍が著れて來ました。其は騎馬戦が多くなつて來たから槍の様な長い武器が必要になつたのであります。源平時代に於て互に名乗り合つて一人一人勝負をするやり方を改めて部隊を操縱する戦法を取るやうになりました。之は一つの大きな進歩であります。城も澤山の小城を本城の前方に置き互に連絡を取つて戦ひ宛も一種の要塞戦の如きものとなりました。

清氏は正平十六年十月頃に來て十七年正月頃には余程勢力を得てゐたのであります。

北朝では細川頼之を之に向はせました。當時頼之は向の備前備中で南朝軍と戦つて居りましたが新に四國に渡つて勤王軍を討つやうに命令を受けたのであります。しかし頼之は四國へ渡るにも船がなかつたので一時は大層困りました。それは海上權が一時殆んど全部清氏の爲に握られて居たからです。あの海賊軍を清氏はうまく従へて居たのであります。漸く下津井で船を得て僅かの兵を送る事が出來ました。そして今の宇多津に上陸しました。

それから青ノ山今日の土器八幡宮の前に陣地を造つて清氏を討たうと計りました。頼之の軍勢は

甚だ小勢、清氏軍は五千餘でとてもそのまゝでは敵對する事はむづかしい、所で頼之は元來智謀の將でありましたので何とかして敵を策略でやつつけやうとしました。そこで自分の母であり。清氏の叔母に當る禪尼を役に立て禮をあつくして和睦を懇請しました。

此の時清氏はすつかり信用して其の講和の條件を出し等してあたら其の交渉往來に數日を費しました。所が頼之方は此の間にすつかり戦争の準備をどこのへてしまひましたから是からは使を出す事はしませんでした。さうこうする内に七月二十三日の夜となりましたら南方今の長炭村方面あたりにかけて一面に大火が空を焦がす程に見えてゐます。之を高屋城から望んだ清氏はこは一大事敵頼之に長尾城を攻めとられてはたまるものかと早速弟頼和に助の兵をつれさせて長尾城に向け救援の爲出發させました。所が頼和が長尾城についたと思はれる頃火は全く見なくなりなりました。と同時に西の方から誰か攻めて来るやうな氣配がします。之は全く頼之の謀です。敵の力を二分して其の一つやつつける爲に長尾城の方は新開遠江守直之をして攻めさせるやうに見せかけて行く／＼炬火をたき、或は沿道の人家に火をつけさせ城近くまで行くど直ぐ引きかへさせて高屋城を窺に攻めさせるやうにしたのであります。

而して二十四日の朝八時頃新開直之は南口から頼之は西口から高屋城めざして攻めたてました。

無念千萬怒りに怒つた清氏は大力勇敢な武士であるから、大槍ひつさげ馬に鞭ち僅か三十數人の先頭に立つて一千餘の敵中へ討つて出ました。かねて清氏の武勇を知つてゐた寄手の軍勢は近づくやうとも致しません。野木備前次郎、柿原孫四郎二人を清氏鞍の前輪に引きつけて頸かき切つて太刀の先につきさし上げ「唐天竺の事はいざ知らず我秋津洲で自分に勝る勇武の者やあらん。敵は他家に非ず、きたなき振舞して笑はるゝなよ」と唯一騎真只中に驅入つて逃げる者は追ひ倒し、近づくものは薙倒す有様物凄い程であります。

爰に備中國の住人陶山三郎と備前國の住人伊賀掃部助の二人が細道傳ひにしづ／＼と馬をひいて行きます。清氏之を見つけて討ち取ろうとしました。陶山ヒョイト溝の中へどび下りました。清氏馬上勇ましくやつて來ました。陶山こゝぞと許りに馬の草脇を槍も通れどグッスリ突きました。馬は立ちすくんで動きません。清氏何を小シヤクナと敵の馬をひつ取ろうと太刀を逆に杖ついて立ちました。備中の住人眞壁孫四郎太刀上げてやつて來ます。伊賀も來ます。清氏の大力眞壁を投げすて、伊賀を袖の下に押へこんで頸を取らふとしました。

伊賀は小兵氣早の士と見えて、ぐいと押へられ乍ら鎧の草摺はねあげてつゞけさまに三度脇腹を刺しました。不意に刺されて弱る所を押し返して頸をかきました。あれ程勇猛敢爲、大力無双の南

朝の將も單騎奮戰誠に惜しい最後をどげました。

大將を討ち取つた頼之方は高屋城に凱歌をあげました。その時頼和は長尾城から歸つて來ましたが、既に遅しでもうどうする事も出來ません。兄は戰死し城は敵手に渡り心はいらだつが仕方がありません。失望落膽の間に淡路を経て近畿の友軍の方へ歸へりました。

× × × × × × ×

弘化年間大阪の曉鐘成が金比羅參詣の序を以て特に此の土地に來て南朝勤王の士細川清氏のあへない最後を偲んでよんだ歌に

露もるゝいと細川のたねてしも

散りし紅葉は血潮ともみめ

とあります。昔此の地は沼地であつたらしい。その沼が血潮にそまつてしまつたであらうと想像したものであらう。

× × × × × × ×

清氏は阿波、讃岐に澤山の部下をもつて居りましたが、徒らに血氣の勇にはやり敵に誘はれてあへない最後をどげましたのはかへすくも口惜しい次第であります。而して清氏がワザ／＼此の林

田村、松山村附近に根據地を置いた理由を考へて見まするに當時此の附近には勤王軍に心を寄せてゐる人民が多くて萬事に便利がよかつた爲であります。即ち現今の皆さんの先祖方が六百年の昔勤王軍に屬してゐた事が察せられます。吾々はこんな立派な先祖の意志をよく受け継ぎ更に又之を未來に傳へて行く義務があります。故に皆様は當時の勤王將士の心を深く味はつて日本精神の發揚に勤めなければならぬと思ひます。そこで此の尊い勤王遺蹟を永久に保護顯彰して行かなければなりません。

(文責記者ニアリ)

建武中興六百年記念祭講演

昭和九年九月二十五日綾歌郡長廣村小學校ニ於テ

香川縣史蹟名勝天然記念物調査委員
鎌田共濟會調査部及全博物館主事

○中院源少將ト讃岐西長尾城

岡田唯吉先生講演

講演目次

序言

中院家ノ勤王事蹟

中院源少將ガ讃岐入りノ時期ト其ノ任務

延元年間以後四國南軍ノ形勢

細川清氏ノ歸順ト西長尾城

細川頼之西長尾城ヲ攻ム

西長尾城ノ位置

中院源少將ノ據ツタ金丸城(小龜城)

金丸城付近ノ關係遺蹟

小龜氏ト協力シテ中院源少將ニ殉シタ大谷氏關係諸城
 阿讃連絡ノ要城タル春日城(仲多度郡七筒村)
 中院源少將ノ末路
 結論

序 言

本日建武中興六百年祭ヲ記念スル講演會ニ於テ私ガ研究ノ一端ヲ御話申上ケルコトヲ得且ツ本席講演ノ主体タル當長尾城主中院源少將ノ子孫ト傳ヘラル、長町氏(現大川郡津田町住)並ニ此中院少將ヲ擁護シタル大谷氏、小龜氏等六百年ノ昔當地ニ於テ勤王サレタ將士ノ子孫タル方々ノ面前デ「中院源少將ト讚岐西長尾城」ト云フ題下ニ御話申スコトガ出來マスコトヲ無上ノ光榮トスル所デアリマス。尙ホ當村史蹟ノ調査ニ際シ萩原氏、篠原氏、大林氏、其他有志諸氏ノ御親切ナル御手引援助ヲ被リ多大ノ便益ヲ得マシタコトヲ此場合厚ク御禮ヲ申上ケテ置キマス。

中院家ノ勤王事績

南北朝時代ニ於テ當城主デアッタ中院源少將ハ如何ナル家筋ノ人カト申シマスト第六十二代村上天皇ノ皇子具平親王ノ御子師房ガ第六十八代後一條天皇ノ御時、寛仁四年(紀元一六八〇年)源姓ヲ賜ヒコレガ所謂中院流ノ祖トナリ其子孫ガ又分レテ中院、久我、東久世、北畠等トナツテ居ルヤウデアルカラ約マリ村上源氏ノ家筋ノ方デアリマス。

而シテ彼南北朝時代ニ於テ此中院家一門ノ勤王家ガ中々多數アツタト云フコトハ勤王史上見逃ス

可カラサル事テ南北朝トナツタ初メ延元年間後醍醐天皇ノ御傍ニ侍シテ輔佐シ奉ツタ中院義定、或ハ征西軍ノ大將トシテ瀬戸内海ノ西方遙カ周防國屋代島、備後鞆合戦等ニ活躍サレタ中院源持房(北畠親房ノ弟)カアリ、又尋テ興國年間南軍右中將中院某ガ兵ヲ發シテ北軍ヲ撃タウトシテ越前ノ人得江頼員ヲ招イタコトモアルヤウデ、兎ニ角中院家ノ人々ハ中央、地方ノ各地ニアツテ盛ニ王事ニ勤メタモノデ當讚岐ニ來ラレタ源少將モ之等一門ニ屬スル人ニ違ヒナイノデアアルガ惜シイコトニハ中院源少將ト云フノミデ其人名ガ各種文献ニ明カデナイノデアリマス。

ソコデ地方史中ニハ「中院左中將貞平」トシテ居ルモノガアル、之ハ即チ花山院師賢ガ大塔宮ノ御策謀ヲ以テ袞龍ノ御衣ヲ著ケ後醍醐天皇ノ臨幸ト稱シテ叡山ニ登ツタ時ノ供奉者中ノ一人デアアル所カラ若シサウデハナイカト云フノデアラウ。又源定平トシテ居ルモノガアル、之ハ尊卑分脈中院流源定成ノ子定平(本名良定、南朝ニ伺候シ元弘以下軍忠ヲ致ス云々)ノコトヨリ推定シタモノデ是等ノ説ニハマダ首肯デキナイノデアリマス。約マリ中院流ノ勤王家ガ南軍ノ爲中央、地方ニ出テ幾多ノ辛酸ヲ嘗メツ、忠勤ヲシテ居タモノガ諸所ニアツテ一々其人名ガ明ラカニサレナカッタノデアアルカラ太平記ノ源貞平等一人ヲ目當テニシテ他ニ中院流ノ人ガナイト早合点シテハイケナイト存シマス

中院源少將ガ讚岐入りノ時期ト其任務

中院少將ガ何年頃讚岐ニ來ラレタカ又其最後ハドウナツタカト云フコトモ明ラカデナイ、唯太平記細川相模守討死ノ条ニ「宮方ノ大將ニ中院源少將ト云フ人西長尾ト云フ所ニ城ヲ構ヘテオハスナル云々」其末尾ニ「西長尾城モ攻メラレヌ前ニ落シカバ四國ハ時ノ間ニ靜マリテ云々」トアルノミデアアルガ、私ハ延元三年頃南軍ガ瀬戸内海ニ出テ、其勢力ヲ延ヘヤウトシタコトガアル此頃中院少將ガ當讚岐ニ入ラレタモノデアラウト察スルノデアリマス。即チ此延元三年前後ハ如何ナル時勢デアツタカト云フコトヲ研究シテ見マスルニ南朝方ニトツテハ頗ル悲境ニ落入テ居タ時デアリマス。即チ延元二年三月ニハ越前金ヶ崎ガ陥リ皇太子恒良親王ハ弑セラレ給ヒ、尊良親王、新田義顯ハ自殺サレ、延元三年五月ニハ北畠顯家ガ石津ニ戦死シ、閏七月ハ南軍ノ總帥トモイフベキ新田義貞ガ越前藤島デ戦死シ翌四年八月ニハ後醍醐天皇ガ崩御遊バサレタノデアリマス。元來南朝方デハ後醍醐天皇ガ吉野ニ御遷リニナリマスト新田義貞ハ北國ニ出デ北畠親房ハ伊勢ニ赴キ、宗良親王ハ東海ニ向ハレテ吉野朝ノ新命脉ヲ起サレヤウトシタモノデ若シ之ガ南軍ノ勝利トナツタナラバ大局ノ變化ハハカリ知ルコトガ出來ナイノデアアルガ不幸ニシテ南軍ノ不利トナツタコトハ反スノモ残念ト思フ所デアリマス。

此時北畠顯家ハ北軍ノ將高師泰ノ銳鋒ヲ避ケ伊勢路ニ轉シ伊賀ヨリ奈良ニ入り更ラニ瀬戸内ニ進

出シヤウト謀ツタガ軍氣ハ既ニ沮喪シ顯家ハ高師直ト攝州安倍野ニ戰ヒ泉州界浦ニ戰死シマシタ。
 ソコデ吉野ノ手足ハ皆削リ去ラレ一縷ノ氣息ハ纔ニ紀勢熊野及湯淺黨ニ由ルノミトナリマシタ。
 約マリ「南風競ハヌ」ト云フ状態ニ陥ツタガ然シ尙ホ多少ノ活氣ハ此口ヨリ鼓動サセ得ルノデ彼花
 園宮(滿良親王)ガ土佐ニ牧宮(懷良親王)ガ伊豫ニ入り西海道ノ脉絡ヲ復シタト云フコトモ此咽
 喉ガ存シテ居ルカラデアアル。又北畠親房、顯信父子ガ再ヒ東國ニ下向シタノモ此咽喉ガ存シテ居タ
 カラデアアル。

此頃帝側ニ **中院義定** ガアツテ輔佐シ奉リ遙ニ瀬戸内デハ征西軍大將 **中院源持房** ガ伊豫忽
 那族ト提携シテ周防屋代島、安藝波多見、備後鞆合戦等ヲシテ西海ヘノ航路ヲ開カウト活躍シテ居
 タノデアアルカラ我讀岐ニモ中院源少將ガ南軍ノ大將トシテ來ラレタモノデアリマセウ。

延元年間以後四國南軍ノ形勢

延元四年(一九九九年 光明天皇 後醍醐天皇 曆應二年) 飽浦信胤ハ備前兒島ヲ以テ歸順シ尋テ小豆島ノ賊軍ヲ破リ義兵ヲ舉
 ケ吉野ニ奏シ主將ヲ派遣シテ戴キ中國ヲ徇ヘタイト申出マシタ。天皇ハ大ニ喜ビ給ヒ信胤ニ對シ御
 手厚イ御説ヲ賜ハリ且ツ薩摩守ヲ授ケラレマシタ。此時伊豫國司藤原有資、全守護大館氏明ガ各使
 ヲ吉野朝ニ遣シ四國ノ大將軍ヲ出シテ戴キタイト御願ヒシマシタ。當時吉野朝ニ於テモ四國付近ヲ

徇ヘタイト云フ企劃ヲ以テ居タ時デシタカラ好機至レリト直チニ總帥故新田義貞ノ弟脇屋義助ヲ伊
 豫ニ遣ハシ西國ノ軍事ハ悉ク此義助將軍ノ節制ニ任カセルコト、致シマシタ。

義助ハ右ノ大命ヲ被リ高野山ニ詣テ熊野浦(田邊)ヲ發シ沿路ヲ招撫シマシタノデ淡路(安瀨志
 知、小笠原、沼島等)小豆島(兒島飽浦)海部等ノ援護ニヨリテ軍船、資糧、器械等ヲ得ツ、伊豫
 今張浦ニ上陸シタノハ實ニ興國三年(二〇〇二年 光明天皇 康永元年) 四月廿三日デアリマシテコレヨリ義助ハ伊
 豫國府ニ入りタノデアリマス。

ソコデ伊豫國司近衛少將藤原有資、同守護大館氏明、土居得能等大ニ聲援ヲ得マシテ官軍ノ勢ガ
 大ニ振ヒ川江、今張、鞆津等ヲ略有シテ備後灘、伊豫灘ヲ控制シマシタ。

所ガ義助ハ間モナク病ニ侵サレ翌五月十一日ニ卒シマシタノデ諸軍大ニ沮喪シ四國ハ相尋テ陷沒
 シ大館氏明モ遂ニ敗死シマシタ。コレヨリ四國ノ官軍又振ハナクナリマシタ。

細川清氏ノ歸順ト西長尾城

コレヨリ十九年ノ後、正平十六年(二〇二年 後光嚴天皇 後村上天皇 康永元年) 十月細川清氏ガ歸順致シマシタ。ソコデ
 伊勢(仁木賴貞)攝津(松山某)伊豆(畠山國清)信濃(全弟義深)等ガ遙カニ清氏ニ應シタノデ
 アリマス。翌十七年春清氏ハ足利義詮等ノ爲ニ京都ヲ回復セラレタノデ堺浦ヨリ乗船シテ當讀岐ニ

渡リマシタ。此時清氏ノ從弟細川氏春（兵部大輔）ハ淡路國ノ勢ヲ率キ三百余騎デ馳着ケ其弟掃部助（信氏ガ父、師氏ノ掃部助ヲツイダカ）ハ讃岐國ノ勢ヲ催シ五百餘騎デ馳加リ小笠原宮内大輔阿波國勢ヲ率キ三百餘騎デ馳着ケタカラ清氏ノ勢ハ程ナク五千餘騎トナリマシタ。清氏ハ今ノ綾歌郡松山村高屋城ヲ保チ西長尾城ト連携ヲトリ再ヒ京都ヲ回復シテ足利將軍ヲ亡サウト謀リタノデアリマス。

當時細川右馬頭賴之（清氏ノ從弟）山陽道ノ南軍蜂起ヲ靜メル爲備中國ニ居タノデアリマスガ清氏ノ歸順ヲ聞テ大ニ驚キ備中、備前、兩國ノ勢一千餘騎ヲ率キテ讃岐國へ押渡リ歌津（地方史ハ土器八幡社ノ邊トイフ）ニ據リマシタ。

カウシテ數日タチマスト賴之方ノ兵ハ向ヒ地ノ備前、備中ノ者共デスカラ兵糧ニツマツテ因窮ヲシテ來タ、コレハ約マリ備前ノ飽浦信胤ガ小豆島ニ渡リ南軍ニ屬シテ海上ニ活躍シテ居リ、又小笠原美濃守ハ清氏ニ同心シテ渡海ノ路ヲ塞イダモノデスカラ賴之方ノ兵ハ日々ニ減シテ落チ行キマシタ。之ニ反シ清氏方ノ勢ハ益々振ツテ參リマシタ。元來賴之ハ智謀ニ長ケテ居タモノデスカラ之ヲ憂ヘ七月二十三日僞テ中院少將ノ西長尾城ヲ攻メルヤウニ見セカケ清氏ノ大軍ヲ西長尾ニ向ケサセテ置キ翌二十四日朝其虛ニ乘シテ賴之自ラ高屋城ヲ攻メ破リ清氏以下終ニ戰死シタノデアリマス。

細川賴之西長尾城ヲ攻ム

細川賴之ハ元來瀬戸内海々上權ノ獲得任務ヲ帶ヒテ居ルノデ今度清氏ノ高屋城入リハ忽チ前面備讃海峽ノ西部ヲ壓迫セラレルカラ大ニ焦慮シタモノデ山間部ノ西長尾城ハ南軍ノ大將中院少將ガ籠リ阿波ノ南軍トモ相策應シテ居ル重要城デハアルガ直チニ内海ヲ脅カスコトハナイ、然シナガラ其前衛タル高屋城ニ清氏ガ入ツタト云フコトハ早速海權ヲ脅カサレルモノデスカラ暫クモ猶豫出來ナイノデアアル

所デ高屋城ノ清氏方ハ新銳ノ大軍ヲ率キテ海上ニハ淡路、小豆島、海部ト相携へ陸上デハ中院少將ノ西長尾城ト完全ナル連絡ガ取レテ居ルト云フ強勢デアアルニ反シ賴之方ハ頗ル貧弱ナル孤立ノ旅兵デアアルカラ到底對向ハ出來ナイノデアリマス、ソコデ智謀ニ長ケタル賴之ハ七月二十三日ノ朝新開遠江守眞行ヲ召シテ

今兩陣ノ体ヲ見ルト敵軍ハ日々ニ優勢トナリ御方ノ勢ハ次第ニ減少スルノミデアアル、コノ状態デ數日モ經ルト到底合戦ハ出來ナクナルデアラウト思ハレルカラ

宮方ノ大將中院源少將ノ居ル西長尾城ニ向ツテ攻勢ヲ取ルヤウニ見セカケレバ必ス清氏ハ西長尾城ニ大兵ヲ差向ケテ之ヲ援ケルニ相違ナイ、ソコデ夜陰ニ乘シ我軍ハ道ヲカヘテ馳セ歸リ高屋城

へ押寄せ自分ハ搦手ニ廻テ敵ヲ挑メハ清氏ハキツト出テ戰フデアラウカラ之ヲ掩撃セバ一舉ニシテ大敵ヲ亡ホスコトガ出來ル

ト云フテ新開遠江守ニ四國、中國ノ兵五百餘騎ヲ與へ沿道ノ在家ニ火ヲ懸ケテ西長尾へ向ハセマシタ

サウスルト案ノ如ク清氏ハ之ヲ見テ敵ハ西長尾ノ城ヲ攻落シテ後へ廻ラウト巧ンテ居ルヤウダカラ中院殿ニ加勢ヲセネバナラヌト云ツテ弟左馬助頼和、從弟掃部助信氏ヲ兩大將トシテ千餘騎ノ勢ヲ西長尾ノ城へ差向ケマシタ

新開ハ元來長尾城ヲ攻メルノガ目的デハナイノデ敵ヲ牽制スル爲ノ狂言デスカラ態ト日ヲ暮ラス爲ニ足輕少々差向ケテ城ノ麓ニアル在家所々ヲ燒拂テ向陣ヲ取リマシタ

城ノ方デハ大勢デアアルカラ新開ガ責寄せテ見ヨ一度ニバツト懸出テ一人モ殘ラズ討留メテヤルト勇ンデ居ル、所デ夜ハダン／＼フケテ來タカラ新開ハ向陣ヲ籌ヲ多ク燒殘シテ山超エノ直道カアル所ヨリ引カヘシテ清氏ノ高屋城へ押寄せタノデアリマス

西長尾城ニ向ケラレテ居タ左馬助ハ二十四日ノ夜明ケテ後新開カ引歸シタノヲ見テ之ハ高屋軍ノ勢ヲ外へ分ケサセテ置キ其虛ニ乘シテ城ニ攻メ寄せヤウト斬ツタモノデアアル、急キ高屋城へ馳返テ

戰ハネバナラヌト大急キニ馳返シタ所ガ新開ハ道ニ之ヲ待受ケテ左馬助ノ軍ト戰フ内大ニ負ケマシタノデ左馬助兄弟ハ勝時アゲテ高屋城ニ歸テ見マスト兄清氏ハ既ニ戰死シ城ニハ敵ガ早入替テ居タモノデスカラ力無ク落行ク勢共ヲ率キテ淡路國へ落チ行キマシタガコ、ノ兵共モ此事ヲ聞キ皆變心シテ淡路ニモ居タ、マラズ小舟一艘ニ乘テ更ラニ和泉國へ落チテ行キマシタ、西長尾城モ攻メラレヌ前ニ落チマシタカラ四國ハ時ノ間ニ靜マツテ細川頼之ニ靡キ順ワタノデアリマス。

(戦況ハ太平記ヲ参考シタモノ)

西長尾城ノ位置

長炭村大字長尾ハ北ニ城山(シロヤマ)(三七五米)猫山(四六五米)東ニ鷹丸山(三八七米)ガ鼎立シテ西南方低地ハ土器川ニ臨ンデ居マス、古來西長尾ト云ツテ居ルノハ此三山中ニ順次造ラレタモノ、ヤウデアリマス

(金丸城)鷹丸山脈ノ西端山腹

小龜城太郎某ノ要城ト傳ヘテ居ル昔長尾村ノ地頭ニ小龜太郎ト云フ者ガアリ其祖廟ヲ建テ、小龜大明神ト云ツタ貞治ノ時源少將ガ來テ此城ニ據リ源少將ガ亡ンダ時小龜氏亦之ニ殉シタ、城太郎ノ長男ヲ小太郎、次男ヲ次郎ト云ツタ

「讚岐名勝圖會稿本」「西長尾城」ノ條ニ今廢ス、或ハ金丸城トシテコ、ニハ延元三年(一九九八年)後醍醐天皇(一三三三年)後光嚴貞治元(一三三三年)後村上義尊(一三三三年)伊豫ノ土居通増得能通村ガ満良親王ヲ奉シテ此ノ城ニ入り又正平十七年(一三三三年)後村上義尊(一三三三年)細川頼之ガ細川清氏ト戦フ時ニ官軍大將公家ノ中院源少將ガコ、ニ城ヲ搆ヘテ居タ云々

「讃州府志」ニハ延元年間(一九九六年)後醍醐天皇(一三三三年)後村上義尊(一三三三年)中院源少將(一本定忠)コ、ニ居タ延元三年得能通村満良親王ヲ奉シテ長尾城ニ入ツタ中院源少將ハ南朝ヨリ任命サレタ讚岐守デ正平十七年ニ歿シタノダカラ前後二十年餘ノ間此地デ南朝ノ旗ヲ翻シテ居タモノラシイ云々。

(城山)

貞治元年海崎元高ガ高屋役ニ功アリ栗隈、岡田、長尾、炭所四村ヲ與ヘラレテコ、ニ城イテ居リ應安元年(二〇二八年)後光嚴(一三三三年)義滿(一三三三年)正月二十七日大隅守ニ任セラレ、ソレヨリ長尾大隅守ト稱シ其男ヲ分テ炭所、岡田、栗隈ニ城ヲ居ラセコレヲ長尾ノ三家ト稱シマシタ、爾後子孫綿々世々封ヲ繼ギ天文、元龜ノ間ニ及ビ土佐元親ニ降テ尙ホ、城邑ヲ有シタガ豊公ノ四國征伐ニ及テ遂ニ其城邑ヲ失ヒマシタ。(全讚史)

(國吉城)

天正八年(二二四〇年)正親町信長(一五七四年)春土佐元親ガ此山(猫山)々脈ヲサスニ城キ國吉甚左衛門ニ兵一千人ヲ將ヒ

サセテコ、ヲ守ラセ讚州諸城ヲ監視サセタ之ヨリ此山ヲ國吉ト稱スルヤウニナリマシタ。

又阿州ノ大西白地ヨリ六里山路ヲ開キ軍餉ニ便シ兵機ヲ自在ナラシメタト云ブコトデアル。

中院源少將ノ據ツタ金丸城(小龜城)

(位置及現況)

大字長尾、字天神、小字城ノ臺

長尾村ノ東南ニ連亘シテ居ル鷹丸山(三八七米)一脈ノ西々南ニ斗出シテ居ル中腹西端二五〇米ヨリ二〇〇米マデノ頂上部、廣サ東西一五〇米、南北六〇米ノ地点デ北西方ハ概シテ嶮岨ヲ攀登シ難イ其麓ヲ城後原ト稱シ西南方ノ稍々登リ易イ所ニ一條ノ古路ラシイモノ斷續的ニ存シテ居ルノヲ認メマス、其南麓ヲ腰卷谷ト稱シマス、右頂上部ハ概シテ東北部高ク西南部低イ地形ヲ利用シテ凡ソ二段トシタヤウニ見エル而シテ上段ノ中央部ト思ハル、所ニ岩石少々露出シテ居ル、上段最東部(二五〇米付近ノ地点)ノ東手ニハ巾約十米、深約六米ノ濠ヲ南北約八十米ノ間ニ通シテ東方高地ヲ遮斷シ且ツ其掘リ取ツタ土砂ヲ城ノ上段(濠ニ接スル東端地点)ニ盛リテ更ラニ十餘米ノ最高所トシテ東方ヨリノ迫撃ニ備ヘ兼テ四方ノ展望ニ便シテ居ル即チ

北方、城山、猫山、高見峰ヲ指呼ノ間ニ望ミ、南西方、脚下ニ土器川ヲ隔テ、仲多度郡、吉野

神野七ヶノ諸村並ニ琴平大麻山ヲ眺メ更ラニ遙カナル阿讃國境連山ヲ望ミ展望實ニ絶佳デア
該城地付近ハモト小笹ノミ繁茂シテ居タガ今ヨリ十二、三年前松ヲ植エタモノガ今日一丈餘ニ成
長シテ居ル爲的確ナル測量ノ出來ナイコトヲ遺憾ト致シマス。

(戦法)

按スルニ彼中院源少將ハ西長尾村ノ土器川流域ニアル小龜城即チ金丸城ヲ根據トシコレニ隣接セ
ル炭所村(大字炭所東)ニアル大谷城、平山城、種子城遙ニ現今仲多度七箇村ノ春日城等ト相策應
シテ其何レモガ各々天嶮ヲ利用シ所謂一種ノ聯合要塞地帯ヲ形成シテ其攻防ニ便スルノ方策ニ出タ
モノデアリマス、約マリ或ル廣範圍ノ自然地域ヲ大ナル城郭トシ其防禦地域内ニ多クノ小城寨ヲ配
置シタヤウナモノデアアル。

元來我邦南北朝時代ニ於ケル城寨ノ特色ハ概シテ天嶮主義デアツテ當時マダ人工ノ築城術ガ充分
ニ發達シナイ時デハ一ヶノ小城寨デ到底敵ヲ支ヘルニ足リナイ、サレバト云ツテ自然地域ヲ頼ムノ
ミデモ不安心デアアル所カラ天嶮ト人工ト相俟テ效果ヲ發揮セシメヤウトシテ此形式ヲ案出シソレガ
著シク行ハレタヤウデアアル。

尙ホ南北朝時代ニ於ケル武器、戦法ト築城主義ノ關係ヲ考察スルト

(一) 槍トイフヤウナ武器ハ此頃始マリ尙ホ軍陣ノ工夫ガ漸ク積モリ一騎打ノ高名ヨリモ一軍ノ進
退ニ注意スルト云フ風ニ訓練サレタカラソノ據ルベキ城寨ハ從來ノ一柳主義デナク所謂聯合城
寨主義ニナツテ來タモノデアリマス

(二) 然シナガラ武器ノ飛道具トシテハ矢張り弓矢ヲ用ヒ(未ダ銃砲傳來セズ)タ時ダカラ地勢上
攀登スルコトノ出來ナイ嶮岨ノ所ハ防備ヲ施ス必要ナク只登ツテ來ラレサウナ所ニノミ濠トカ
壘柵ヤウノモノヲ設ケテ固メトシタモノデ約マリ天嶮主義ハ依然トシテ續ケ用ヒラレタノデア
リマス。

サウデアリマスカラ當長尾城ノ築城策ハ宛モ彼楠氏ガ南河内ニ據テ袋ノ底ニモ似タ東條川ノ流域
ヲ天然ノ城郭ト頼ノミ其城域内ニ數多ノ小城寨ヲ配置シ更ラニ千早、赤坂ノ如キ據城ヲ置イタトイ
フ實ニ巧妙ナ築城策ニ似テ居リ或ハ肥後ノ菊池氏ガ菊池川ト合志川トノ流域即隈府付近ノ地域ヲ天
然ノ城郭トシ其城域内ニ多クノ小城ヲ配置シ所謂菊池ノ十八外城ト稱スル策謀ニ出タモノトモ能ク
相似テ居ルト思ハレルノデ中院源少將以下小龜氏、大谷氏等ノ方略ハ實ニ巧妙ナルモノデアリマス

金丸城附近ノ關係遺蹟

一、(土居屋敷) 土居トハ土堤ヲ圍ム意テ今日ノ大字長尾字天神、現天神社ヨリ西北七丁ノ田圃中(縣道

貞光線ニ沿フ)ニアリ其廣サ約三段歩モアル

之或ハ小龜氏ノ居館跡(平常ノ住家ヲ城ヲ兼ネル)デ中院少將モ多クハコ、ニ居タモノデアリマセウ

二、(天神社) 大字長尾字天神ニアリ村社三島神社境外末社

舊ハ現社ヨリ約三丁西麓田圃中ノ天神屋敷ト云フ所ニ在ツタモノデ土居屋敷即チ小龜氏居館(平常ノ城ニアタル)ノ東南上方三四丁ノ地点ニアリ其鎮守社トシタモノデアアル所カラ今尚ホ中院少將建立ト傳ヘラレテ居ルノデアリマセウ。後享保十乙巳年二三八五年 中御川吉宗四月二十五日榎本伊九郎國吉某相ハカリコ、ニ移シタト云フ

三、(小龜社) 大字長尾字天神ニアリ村社三島神社境外末社

祭神、武甕槌神トナツテ居ルカラ所謂常陸鹿島郡鹿島町ニアル鹿島神宮ト同ジデアアル、常陸鹿島宮ハ現今官幣大社ニ列セラレ古來上下ノ尊信アツク特ニ鎌倉時代ノ初源頼朝ガ社殿ヲ修理シ社領ヲ寄セ大ニ之ヲ崇信シテ以來公武ノ尊崇一層渥クナツタノデアリマス

隨テ當時中院源少將ヤ小龜氏等亦此神ヲ祭リ(合セテ小龜氏累代ノ神靈ヲモ祀リ)小龜大明神トイフタモノデアリマセウ。明治四十年頃現天神社地ニ移シタ

四、(小龜氏墓) 大字長尾、宇天神小龜歌次宅ノ上側ニアル

五輪塔數基アツテ中ニハ數百年ノ昔ヲ偲バセルモノデソレガ又立派ナモノモ一、ニアルヤウデアリマス

五、(小龜氏ノ族存ス)

大字長尾字天神ノ地即チ金丸城籠ニハ今尚ホ小龜姓七家アリマシテ去ル大正ノ初頃醫師小龜某ノ主唱デ小龜氏全家ヲ中心トシ天神部落民モ加リ小龜講ヲ組織シテ毎年春秋二期神職ヲ聘シテ祭祀シテ居ルサウデアアル

六、(清源寺)

金丸城ノ西南麓ニアリ今僅ニ藁葺方ハウキヤウ形造リノ小堂ガ存シテ普通ニ藥師堂ト稱ヘテ居ル、舊、中院源少將ノ建立デ本尊木造藥師如來(丈一尺八寸立像、一見鎌倉時代ノ佳作ト認メラル)ハ少將ノ尊信最モアツク常ニ主僧ニ祈禱ヲ掌ラセタモノデ此寺ヨリ金丸城ニ通スル途中ニ主僧ノ「經落シ谷」ト傳ヘル所サヘアリマス

モト瑠璃山、清源寺ト云ツタノヲ天正頃林藏人(國吉長左 禰門ノ臣)ガ寺ヲ嗣ギ林藏院ト改稱シ境内ニ山王藥師堂ノ後側ニ古石塔數基アル又堂ノ東方約三丁ノ所ニ清源寺池ガアル、右小龜氏墓ト傳ヘラル

ル石塔及清源寺石塔中ニ或ハ中院少將等ノ墓ガアルカモ分ラナイト察セラレルノデ何トナク風聲
哀鳴シ非常ナル哀愁ノ感ニ打タレタノデアリマス

七、(城ノ井)

現天神社ヘノ上リ口(向テ左側)ニ清水ガ湧出シテ居ル井戸ガアル一見甚ダ淺イ井戸デハアルガ
如何ナル旱魃ニモ水ガ枯レナイト云ハレテ居リ又付近ハ水潤地ノヤウデモアル所ガラ察スルト或
ハ昔城ノ井トシテ用ヒラレタモノデハアルマイカ、彼南北朝時代詮間氏ノ居城トスル現三豊郡詮
間村、字城塙ノ上リ口小竹林中ノ井、及正平頃飽浦信胤ノ部將高橋氏ノ居城ト傳フル小豆郡土ノ
庄町城山ノ北麓ニアル井又香川郡香西町藤尾城趾北麓ノ井戸等ト思ヒ合ハセテサウデハナイカト
思ハレマス

八、(的場)

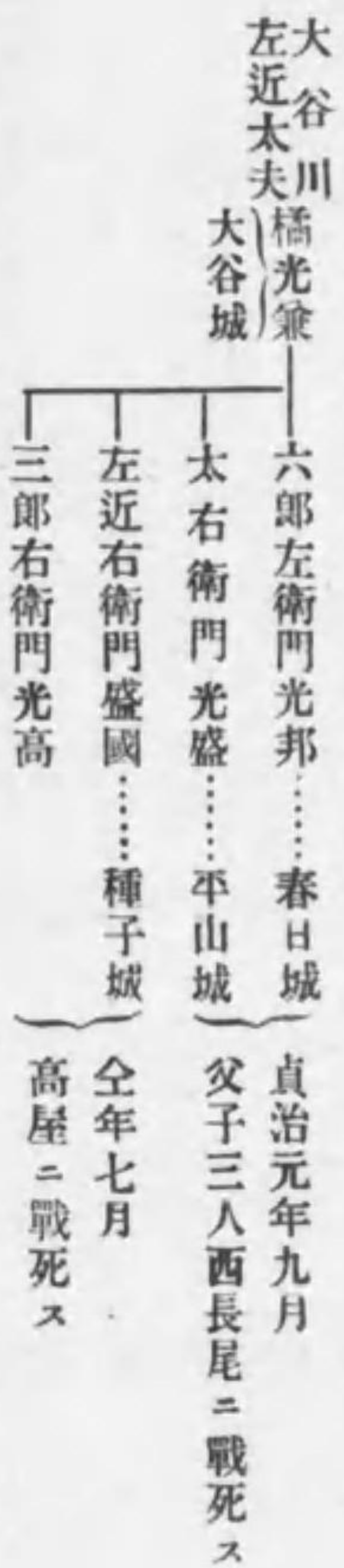
金丸城ノ北麓妙見池ノ傍及城南麓ノ二ヶ所何レモ的場ト稱スル所ガアル之亦或ハ全城關係ノ遺蹟
デハアルマイカトモ察セラレル

小龜氏ト協力シテ中院源少將ニ殉シタ大谷氏關係諸城

一、(大谷城) 大字炭所東字大谷川龜越池ノ西現今ノ大谷國太氏方ノ付近カト思ハレル、全家ノ南

東ニ在ル地ヲ土俗長者ト云ヒ又長者ノ大島トモ云フ所ガアル

昔大谷川左近太夫橋光兼ガコ、ニ居リ南北兩朝初頃ハ細川管領ニ屬シテ其城邑ヲ保チ居タガ 中
院少將南帝ノ勅ヲ奉シテコノ地ニ來ルト光兼ハ直チニ其一族ヲ率キテ之ニ從ヒマシタ當時光兼ニ
子四人アリマシテ之ヲ諸城ニ配シマシタ



全讀史(大谷城ノ記)ニハ貞治元年七月細川清氏高屋ニ亡ビ盛國光高ガコ、ニ死シ同九月細川頼
之ハ大軍ヲ以テ西長尾ヲ攻メタノデ源少將ハ之ヲ拒グコトガ出來ズシテ終ニ自殺シ光邦、光盛ハ
父光兼ト俱ニ奮撃シ衆ヲ麾イテ力戰シテ死ンダトアル

二、(平山城) 大字炭所東字平山小字前畑

三島神社(村社大井神社境外末社祭神大山祇命)ノ南ニ續イテキル平地ノ邊ガ城跡カト云ハレテ
居ル、即チ大谷太右衛門光盛ノ守城

三島神社ハ康永元年二〇〇二年後村上平山大隅守建立ト神社明細帳ニ記サレテ居ル
光明、尊氏 興國三年

三、(種子城) 大字炭所東字種子

大谷左近右衛門盛國守城

阿讃連絡ノ要城タル春日城(仲多度郡七箇村)

大字七箇字小春日一九〇一番田(八畝九歩) 政所屋敷ト稱スル所石垣及城ノ井等ガ現存シテ居ル
由來春日ノ地ハ大字七箇ノ中央ニアリテ南方大字鹽入ニ通シ阿讃交通ノ要衝ニアタリ東スレバ阿波
三好郡晝間村ニ出ル西スレバ山脇(十郷村) 荒戸(三豊郡財田村)ヲ越エテ阿波池田町及白地ニ出
ル北方ハ東路滿濃池ノ東「五毛」ヲ過ギ土器川ヲ渡テ炭所、長尾ニ通シ西路琴平、善通寺等ニ通シ
テ居ルモノダカラ古イ地圖ニハ 春日村 トシテ掲ケラレ(七ヶ、鹽人等ノ地名ヨリモ名高イ)テ
居ル位デ右政所屋敷ハ此阿讃街道ニ面スル高所ニアリ(現今ハ道路ヨリ約一丁半ノ東北ニアル)背
ニ東山々脈ヲ負ヒ前面ハ阿讃道路ヲ扼シテ居ル故ニ此城ヲ守レバ阿讃交通ノ連絡ニ便デアルト同時
ニ其交通ヲ遮斷スルニモ亦便デアル

而シテ延元正平ノ昔南軍中院源少將ノ據城トシテ長尾金丸城ニ應シ小龜氏ト協力シテ王事ニ勤メ
タ彼大谷川氏ガ炭所村ニアル大谷城(大谷川左近大夫橘光兼) 平山城(全太右衛門光盛) 種子城(全

左近右衛門盛國)ヲ以テ之ト連繫シテ居レバ長尾、炭所二村ニ跨ル聯合要塞地帯トシテ足利方ノ軍
ヲ防クニハ充分有利ノ陣地デアルニモ係ラズ遙ニ土器川ノ外ニアリテ一里半餘モ隔テ、居ル遠方ノ
春日城ニ然モ其長男タル大谷六郎左衛門光邦ヲヤツテ守ラセタコトニハ重大ナル理由ガ存シテ居ル
ノデハナイカト思ハレルノデアル、即チ大谷氏ハ此春日城ヲ出城トシテ當時阿波ニアル南軍方トシ
テ小屋平(麻植郡) 東祖谷、西祖谷(美馬郡)等ノ軍ト連絡提携ヲシテ居タノデハアルマイカト察
セラレル。之ニ付テ未ダ我讃岐デハ之ヲ證スベキ古文書等ガ發見サレテハ居ナイケレドモ隣リノ阿
波ノ方デハ麻植郡ノ三木氏、小屋平氏美馬郡祖谷山ノ菅生氏、喜多氏、得善氏、西山氏等關係ノ古
文書約二十通モ存シテ居リ其中ニハ宮方ニ軍忠ヲ致シタノニ對スル恩賞狀ガ多ク其外兵糧料トシテ
預置ノ証書等モ數通アリ且ツツレガ何レモ正平年間ノモノデアツテ我讃ノ中院源少將ガ小龜、大谷
兩氏ノ援助ニヨリ延元正平年間ニ於テ南朝方軍ノ爲メニ奮闘サレ又特ニ彼細川清氏ガ阿野郡高屋城
ニ勤王ノ兵ヲ舉ゲタ正平十六年、十七年ノ頃ニハ阿波宮方軍ノ活動顯著デアツタコトガ想像サレル
ノデ一時阿讃勤王軍ガ緊密ナル聯繫ヲトリ讃岐、高屋城(細川清氏) 長尾城(中院源少將及小龜氏)
大谷城、平山城、種子城 春日城 (以上大谷氏) 阿波麻植郡小屋平氏、美馬郡祖谷山等ノ土豪諸氏
并ニ三好郡大西ノ小笠原氏ト相提携シテ四國ヲ縱斷シ各々其氣勢ヲ大ニ舉ゲ一時足利軍ノ心膽ヲ寒

カラシメタノデアラウト察セラレル

足利方ニ於テ最モ智謀ニ富ンデ居タ細川頼之ガ高屋軍ノ起ツタ時周章狼狽シタノハ無理カラヌコトデ當時軍ニ高屋軍ノミガ恐ハカツタノデハナク春日城ノ存在ニヨツテ阿讃兩國ニワタル宮方軍ノ完全ナル提携ガ出来更ラニ瀬戸内海ヲ横斷シテ中國軍ト結バウトスルニ至ツタコトガ大ニ恐ロシカツタノデアツテ實ニ痛快極マルモノデアル

然シナガラ悲シイ哉元來南朝方軍ニハ豫備兵ガナク後續部隊ノナイ爲此優勢モツカノ間デ終ニ衰滅ニ期シ足利方細川氏ヲシテ其勢ヲ振ハシメルヤウニナツタト云フコトハ切齒ニ絶エナイ所デアリマス

(備考) 春日城及長尾城ニ關スル史料トシテ文書記録未發見ノ爲正確ナル判斷ヲナシ得ナイケレドモ僅ニ現存ノ史蹟ト一地方史上ニ散見スル記事地方人ノ傳説等ニ基キ甚淺薄ナル考証ニ了ツタコトヲ遺憾ニ存ジマスガ尙ホ後日關係史料ノ發見ヲマチ補正ヲ致シタイト存ジマス

中院源少將ノ末路

中院源少將ガ延元三、四年ノ頃ヨリ正平十七年マデ二十四、五年間ニワタリ當西長尾城ニ居テ王事ニ勤メラレタ其間各種ノ艱難ヲ嘗メラレタニ相違ナイガ其末路ガ如何デアツタカ判然シナイコト

ヲ遺憾トシマスガ唯今マデニ傳ヘラレテ居ル諸説ヲ申上ゲ各位ノ御判斷ニ任セルコト、致シマス

(太平記)

正平十七年七月二十四日細川清氏戰死ノ条ニ「西長尾城モ攻メラレヌ前ニ落チタカラ四國ハ時ノ間ニ靜リテ細川右馬頭ニゾ靡順ヒケル」トアツテ中院少將ノ動靜ハ不明デアル

(全讀史)

貞治元年九月細川頼之ハ大軍ヲ以テ西長尾ヲ攻メタノデ源少將ハ之ヲ拒クコトガ出来ズシテ終ニ自殺シタ云々トシテアル

(生駒記。讃岐城壘記)

長尾村金丸城ノ条ニ新田家造田殿トイフ源少將殿居城トシテ貞治元年細川頼之、細川清氏ヲ攻ル時右少將殿モ退キ淡路島ヘ落チ行ク云々

結 論

我讃岐ノ南軍ハコレデ亡ンダノデアリマスガ今ヨリ六百年ノ昔南北兩朝五十七年間ノ前半ナルニ十數年間此長尾城ノミ引續キ中院少將ヲ奉シテ勤王ヲシテ來タト云フコトハ御當地ノ小龜氏、大谷氏ヲ始メトシ滿堂督様方ノ祖先ガ大ニ忠勤ヲ擢テタ結果デアリマシテ此血液ハ今尙督様ノ体内ニ流

レテ居ルノデ敬服ニタエナイ所デアリマス、今日内外重大事局ニアタリマシテ滿堂ノ諸君ハ益々奮
勵祖先ノ忠節ニ劣ラナイ所ノ忠勤ヲ邦家ノ爲ニ致サレンコトヲ祈リマス、長時間御謹聽下サイマシ
タコトヲ深ク感謝致シマス。

昭和十年三月廿八日印刷
昭和十年四月三日發行
【非賣品】

香川縣綾歌郡神職會代表者

編輯兼 發行人 土 屋 德 太

香川縣綾歌郡坂出町三九〇番地第三

印刷人 武 内 達 次 郎

香川縣綾歌郡坂出町三九〇番地第三

印刷所 武 内 印 刷 所

發行所 綾歌郡神職會

終

3
0